慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	国富論と初期の独逸経済学者
Sub Title	
Author	町田, 義一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1926
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.20, No.4 (1926. 4) ,p.512(102)- 534(124)
JaLC DOI	10.14991/001.19260401-0102
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19260401-0102

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

國富論と初期の獨逸經濟學者

町田義一郎

本稿は Hasek— Introduction of Adam Smith's Doctrines into Germany. 1925, chapter III に據る。

一

Adam Smith の「國富論」の最初の獨逸譯 Untersuchung der Natur und Ursachen von Naturalreichthümern von Adam Smith. Weidemanns Erben und Reich, Leipzig Bd. i, 1776, Bd. ii 1778. は倫敦在住の獨逸人 J. F. Schiller の譯したものである。此譯書に對する最初の批評は Göttingen. 大學の哲學教授 J. G. Feder に依て一七七六年三月十日の Göttingische gelehrte Anzeigen. に發表された。Feder は此飜譯を原文と對照して良譯書であると稱した。ところが此譯文に就ては G. Sartorins が一七九三年十月十九日の Göttingische gelehrte Anzeigen. に批評して「.. Schiller は必ずしも正確に譯して居らぬ。併し原書が極めて難解であり、且つは其用語が專門的な又法律的な言ひ現し方をされてゐるので英國人自身にも難解不明確なのである」と述べた。

之等二人の批評家を生んだ Göttingen 大學は獨乙に Smith の思想を傳へるに最も貢献のあつた大學である。尙此外後に述るが如き Lueder 並に Kraus 或は Hufeland の樣な當時に於ける Smith の經濟學說の繼承者は同大學の關係者であつた。

「國富論」の最初の批評家 Feder は同書の內容を以て Classic なりと評した。そしてその周到なそして往々達見な政治哲學を述べた點及び多方面に亘つた澤山の歷史的記錄を揭げた點に於て大いに尊重すべき著書と爲した。又 Smith の Steuart に反對の態度及び Physiocrats に對しての好意的態度に就て述べ各篇各章を採つて所々に論評を加へた。Smith の lasseiz faire の論旨は特に彼に多大の感動を與へたものであるが、併し Feder は何等の疑も懷かずに之に服したのではない。「廉價と放漫な掛賣とに依てのみ顧客を得る事が出來るのであるから、餘り過大な競爭の結果として起る劣等品及び詐欺行爲、斯かる自由の下に於て興味はあるが併し金儲にならぬ商賣を選擇する多くの人々の失敗並に多數の有能な人々が、就中その人が同じ樣に正直な時、過度の競爭に依て强いられるに至る結果は、斯かる完全な自由のどんな利益も償ふには足らぬ樣な弊害に思はれるのである。」との異論を述べた。

更に彼は Smith の生產的及び不生產的なる語の用法並に消費制限の政策に對する Smith の攻擊に反駁を加へ「著者〔Smith〕が學者の職務並に從て又之等の人々の扶持に費される部分の國富を不生產中に數へる時は此〔生產的〕觀念を餘りに狹く限定せる觀がある。」と稱し、又國王及びその臣下が私人の經濟を取締つて奢侈禁止法及び外國品輸入禁止に依てその消費を制限せんとするのを Smith が全く無益不當の事なりと主張するのに反對して Smith の言を以て「その措辭餘りに熱狂せる斷定」であると爲した。此批評に就て特に注意すべき事は「國富論」に關する知識と之に對する同情ある態

度、並に本書の原理を普遍的に適用し得るや否やを疑問とした點にある。Feder は曰く「彼の多くの提議は國家の一般の原則中に加へらる可きものではなくて、單に產業、富裕及び文明の一定の階段に於てのみ正當なものである」と。Göttingen 大學に起つたこの批評は英國の事情に對する熱心な興味と知識、並に當時行はれつゝあつた Cameralists の精神を反映したものである。

Feder と略〻時を同じうして一七七七年と一七七九年に Nicolai の Allgemeine deutsche Bibliothek. 並に一七七七年に Isaak Iselin の Ephemerides der Menschheit. 中に二つの批評が發表された。二評論共 Smith の見解と自己の見解と多少相等しうした Physiocrats 系の人の筆になつたものである。Bibliothek 中の筆者は Smith は何處にも Economistes(Physiocrats)の用語を用ひては居らぬが、併し Smith が地代の騰落は安寧幸福の增減を確實に指示するものであるといふ論點に於ては彼等 Physiocrats と全く見解を同じうしたものであり、又「Economistes と彼とは根本的には同一精神のものであつて租稅論を除いては彼は彼等の認めない樣な說を述べては居らぬ。斯くも正しく、賢明な見解を懷く英國人に幸あれかし。」と述べてゐる「。Isaak も亦その長い批評中に巧みに Smith の意見を拔萃して Physiocrats の學說が更に確證を得たものであると稱した。

然るにその後一七九四年に至る約二十年間獨乙に於ては Smith の著書は殆んど注意を拂はれなかつたのである。Frederick 二世の存生中は普魯西に於ては Cameralism が爭ふ可らざる勢力を占めて居て、佛蘭西革命の勃發と共に起つた經濟的變化は未だ經濟問題の論客をその獨斷論の眼から覺すに足るだけの勢を得るに至らなかつた。從て此間に Cameralists 及び Physiocrats に依て行はれた Smith の著書からの引用は不徹底を免れず又 Smith の立場を本當に理解せぬものであつた。

一七九三年に Göttingische gelehrte Anzeigen. に George Sartorius の批評が發表され、これには「國富論」第三版の追加も論及された。又一七九四年には Christ. n Garve の新譯 Untersuchungen über die Nature und Ursachen des Nationalreichtums von Adam Smith. が刊行された。そして同年の Göttingische gelehrte Anzeigen. に掲載された Garve 譯に對する批評は之が立派な飜譯である事を認めた。また Smith の理論は廣く普及されねばならぬものであつて、若し又誤謬があるとすれば徹底的に論破されねばならぬのに未だ此事の行はれた事も亦之を行はうとした事すらもなく、彼の思想は獨逸の經濟思想の上に何等の影響をも未だに與へて居らぬと云ふ事も指摘した。Garve の譯は一七九六年に再版、一七九九年に改定第二版、一八一〇年に第三版が刊行された。

二

Göttingen 大學の關係者ではなかつたが Smith の思想普及の大なる貢獻者中に加へられねばならぬ人に前揭「國富論」の譯者 Christian Garve がある。彼は一七四二年に Breslau に生まれ一七九八年に五十六才を以て同地で逝去した。教育は Frankfurt(an der Oder)の大學及び Halle 大學で受け、一七六八年から一七七二年に至る四年間 Leipzig 大學で哲學の助敎授を勤めたが病弱の爲め Breslau に戻り同地でその一生を著述と交友とに暮した。彼の一生中の最も著名な出來事は Frederick 二世と知己になつた事であつた。通俗哲學者たりし彼は夙に蘇格蘭の著述家等に興味を懷き獨乙に於けるその最も卒先した解說者の一人であつて「國富論」譯出の遙か以前既に A. Fergson の Essay on the

History of Civil Society.（1772）Burke の On the Origin of our Ideas of the Sublime and Beatiful.（1772）及び J. MacFarlan の Inquiries Concerning the Poor.（1785）並に佛蘭西語希臘語及び羅典語の諸書を譯してゐる。

彼が初めて Smith に親しんだのは Schiller の獨譯を通じてゞあつた。彼が「國富論」をその當時の Classic Works の一と認めた事と Schiller の譯が拙劣で殆んど了解し難かつた事が終に彼に自ら新譯を企てさせるに至つたのである事は友人 Weisse その他宛の書簡に依て明かである。そして一七九一年に着手され同年十二月には第一卷の前半は譯了せれた。併し乍ら彼が此譯に從事した主たる理由はやはり Smith の見解に感動したからであつて自らその序文中に「私の研究の間に在つて僅少の書籍が爲し得たのと同樣に、それ［國富論］は彼［Smith］の研究の實際の對象に關してのみならず市民生活及び社會生活の哲學からの有ゆる相關連した資料に就て私に與へた幾多の新見解に依て私の心を惹着いけたのである。」と述べてゐる。斯くて彼の飜譯はその後半の可成の部分を Leipzig の遞管理官（Ober-Post-Commissär）Dörrien の助力を得て一七九四年に出版の運びに至つた。Garve は附錄の形式で（一）Smith が人間の知識の總體に對して新しい眞の貢獻を爲したものと彼が認め得る樣な Smith の思想及び主義の概略を述べ、（二）Smith の主立つた若干の定理を更に分解しやうとの意向を有して居た。斯かる分解を附したとしたらそれを行ふにつ當ての Garve の根本思想は彼の起草した諸種の論文中に之を見出し得るのであるが、その中で經濟學の範圍に屬する論文は Vermischte Aufsätze.（Breslau, 1796）中の Überden Charakter der Bauern und ihr Verhältniss gegen die Gutsherrn und gegen die Regierung. 及び Bruchstücke zu der Untersuchung über den Verfall der kleinen Städte, dessen Ursachen, und die Mittel ihm abzuhelfen. の二篇である。之等の論文中に何等か Smith の影響の跡を求めやうと云ふのは困難であらう。蓋し彼は本來通俗哲學者、評論家、註解者並に飜譯家であつたのでその興味は主に哲學及び文學の方面にあつた。Smith に對する興味も先づ蘇格蘭一派の哲學者に對する尊敬にその源を發したのである。「國富論」の飜譯は彼の餘暇の勞作であり、その日の主な著述の終つた後で筆を取られ又不意に旅行の資に供せんが爲めに始められたのであつた。經濟問題に關する彼の思想は Frederick 二世時代に廣く行はれつゝあつた經濟觀の進歩した寧ろ自由な祖述者と見做る可きものである。Frederick 二世に對する彼の崇敬はその長論文 Fragmente zur Schilderung des Geistes, des Characters, und der Regierung Friedricks des Zweitens,（Gesammelte Werke. Breslau, 1801）に明かであるが、尙前揭論文の Über den Charakter der Bauern . . . . 中にも彼は普魯西國內に居住する一著述家として、國家經濟に關する幾多の點に於て彼がその君主の行動或は少なくともその所見の基礎となつた諸規準と相一致し得るといふ事は眞に冥加な次第であると述べた。

彼は農業狀態の改革に關する提案中に於ては上流社會の好意に訴へ、一層良き敎育制度に依て地主階級の改善を行ふ事及び之等の人々が代理人に依らず自ら土地の耕作に意を用ふるといふ事が所有權を危からしめる樣な急激な改革を不要ならしめるであらうと爲した。そして大體に於て農夫は貧困なものと見做され又兒童に等しきものとすら見做さる可きものであつて急激な改革は避く可き

ことであると爲した。更に彼は歴史に意を注ぎそして經濟問題に於てもその根源を求めんとする見解を強く主張する傾向があつた。獨乙に於ける小都市の興亡はその土地の制度變遷の歴史的研究に依て決せらる可きものであると爲した。そして原理の形式を以てする普遍化といふ事を避け、普遍より寧ろ特殊の方が重要であり、就中實際問題に於ては重要であると爲した。Garve がその意向通りに Smith の思想を分解批判したとしたら彼は以上の如き見解を基礎として之を行つたであらう。兎に角獨乙經濟思想の變遷に對するGarveの大きな貢献は「國富論」の良譯書を出版した事にあつた。

III

獨乙の學者中で Smith の影響を受けて獨創的な著作を最初に發表した人は George Sartorius であつてその著書は Handbuch der Staatswirtschaft, zum Gebrauche bey akademischen Vorlesungen, rach Adam Smith's Grundsätzen ausgearbeitet, von Georg Sartorius. Berlin 1796. といふ小著である。Sartorius は一七六五年に Cassel に生れ一八二八年に六十三才を以て Göttingen で逝いた。彼の一生は殆んど Göttingen 大學で終始したのである。即ち一七八三年から一七八八年まで同大學に學び、一七八六年から、一七九四年に至る間圖書館の仕事に携り一七九二年に講師に任ぜられ、一七九七年には助教授に又一八〇二年に正教授に進んだ。彼は極めて多作家であつた、がその最も著名な最大の著書は die Geschichte des hauseatische Bundes. 1802-1808. である。彼は先きに述べた哲學教授 Feder の弟子及び友人として Smith 研究の最初の刺激を彼から受けたのであらう。一七九三年及び一七九四年の Göttingische gelehrte Anzeigen に著はれた Smith に關する評論は彼の筆になつたものである事は既に述べたところである。

本來 Sartorius は史學の教師であつたが一七九二年から Smith に據て經濟學の原理を講義し學生に對して Smith の思想を紹介するに成功した旨を Handbuch の序文中に掲載してゐる。又 Smith の說くところを以て眞理であると確信して此 Handbuch を著はしたのであつた。獨乙に此眞理を普及する事を自己の任務と見做してゐた（同上序文）。そして舊制度が急速に變化しつゝある此時期に際してGarve の立派な飜譯並に彼が「國富論」を更に解說せんとの誓約があるにしても尙且つHandbuch の樣な著書が別に必要なことを Sartorius は痛感したのである。斯くて著はされた此 Handbuch は學生に對して Smith の學說を反復講義したその副產物と見做さる可きものであつて全然「國富論」に基いたのである。先づ全卷を二篇に分ち第一篇は「一國民の欲望が充足せらるゝ資源、即ち國民的繁榮の要素について」と題し更に之を二部に分つた、此第一篇は「國富論」原本の第一第二篇を略說したものである。第二篇は「國家經濟即ち市民に十分なる所得を獲得せしめ又國家の公費支辨の爲めにも同樣の所得を得んが爲めに國家が從はざる可らざる定則について」と稱して之も二部から成り、原書の第四第五篇に相當した。玆に獨乙の經濟學文獻中初めて經濟學の理論と經濟政策の區分が行はれたのであるが、斯かる政策に重きを置いた區別は Cameralists の實際政策からも全く說明し得るところであつて且つ後の獨乙に於ける、Smith の思想繼承者も此區分に從つた。さり乍ら Sartorius は「國富論」に對する稱讚と心醉の言葉に滿ちた此 Handbuch 中に於ても尙細部を看過せずして「詳細の點に於ては Smith は誤謬に陷つてゐる。大陸に關する多くの歴史的材料は勿論間

違つてゐる。彼の理論の或結論すらも一致を欠くの觀があり又變更されて居る。」と指摘した。併し之等の異論を唱へたり、或は同書中に異なれる歴史上の説明を用ひたりして居るけれども本書の大部分は「國富論」の拔萃であつた。

十年の後 Sartorius は更に經濟學に關する三書を公にした、即ち Von den Elementen des National-Reichthums, und von der Staatswirtschaft, nach Adam Smith. Göttingen 1806. 及び Abhandlungen die Elemente des Nationareichthums und die Staatswirtschaft betreffend. Th. I. Göttingen 1806. が之である。彼が既に先きの Handbuch 中で少しく指摘した Smith の思想に對する疑問に就て此十年の間に彼が更に考究を重ねたことは von den Elementen の序文に依ても窺知する事を得るが、併しその反對論は他の著書に讓つて此 von den Elementen は Handbuch より幾分長篇な一層「國富論」に從て書上げられたその概要にすぎなかつた。そして連續刊行書の第一卷としやうとして著はされた次の Abhandlungen は Smith の經濟思想に對する Sartorius の獨立の見解を述べたものである。

Abhandlungen は四論文から成り、Smith の勞働價値説、節約と國富增進との關係、國富と私人の富との間に於ける獲得の相違、國家政府の私人企業に對する關係、をそれぞれ論じたのであるが、初めの三論文は一八〇四年一月に出版された Lauderdale 伯の An Inquiry into the Nature and Origin of Public Wealth, and into the means and Causes of its Increase. Edinburg, 1804. にその端緒を得たものである事は明かである。同伯は前掲書中で三論文と同一問題をその第一、第二及び第四章で取扱つてゐるのである。Abhandlungen は Lauderdale の之等三章が Sartorius 流に略述され註釋或は批評の附せられたものであつた。即ち Sartorius の所論は次の如くであつた。

Smith の價値論は「一部分は漠然として居り又一部分は不完全である。」「一物の價値は先づ第一にその物に依て爲し得る用途、その物が滿足させる必要、その物の與へる快感に從て評價される。」即ち價値の第一源泉はその物の用途にあるが、價値は又生産費及び他物との交換の比率に因ても決せられるのである。併し乍ら交換價値は寧ろ之等二つの決定要因の作用の結果であつて之等と同等に重要なものなのではない。價値と同樣に價格も同一の複雜な原因の相互作用に從ふのである。それ故に貨幣は價値の不變的尺度として役立つ事は出來ない。勞働の價値はその有用性、その生産費及びその交換價値に因て決せられるのであるからして勞働も他の有ゆる物と同樣に同一の價値決定要因に從ふのである。故に貨幣或は穀物と同じ樣に勞働は價値の不變的尺度としては用ひ得ぬものである。斯く論じて Sartorius は勞働價値説を以て「奇妙な虛僞の結論」であると爲した。

第二論文では國富增進の手段としての節儉を論じて、國富增進の源泉は節儉ではなくて土地、勞働及び資本の生産力であるとの Lauderdale の Smith に對する反對論に贊成せずに個人の節儉のみが斯かる生産力を可能ならしむるものであるとの Smith 説に贊成した。

第三論文は Lauderdale の國家の富と個人の富裕との相違に關する意見を述べたものである。此處に Sartorius の興味を惹いた問題は名義的價格及び實際價格の國富の增減に對する關係である。名義的價格騰貴の原因は國富の增進に影響するものではなくして單にその國富の再分配を決する原因である。然るに財貨の實際價格の騰貴は國富增加の結果か或は斯かる增大の原因となり得るもので

ある。

第四論文は國富の發達に伴ふ國家政府の協力を論じて前三論文に比して遙かに獨創的竟見を述べた。即ち Sartorius は各個人は自己の利益を追求することに依て總ての人の利益を增進すると云ふ Smith の所說を出發點と爲して此立論には幾多の例外の存在する事を明かにした。大資本家は小資本家を壓服し又社會公衆を私利に利用することがある。土地は勝手に增加し得ないものであるから個人の所有する土地の全然自由な處分を許すことは躊躇すべき政策である。自由貿易に於ては一國が他國を敗滅させることがある。以上の如く競爭に伴ふ弊害は指摘された。Smith の提出した提議は斯く價値の疑はしきものであるからして政府は發生の虞ある不利益を補ふ手段を構ずる義務がある。若しも凡て世界が文明の進步した一國家であつたとしたならば Smith の理論は適用し得るかもしれぬが、歐洲の如くそれぞれ國家的存續を維持しやうと努めつゝある多數の國が存在しては關稅、戾稅、自由港その他の手段を用ふる事が必要となる。斯くて時には廣く亘つた國家の干涉が往々得策となる事がある。併し Sartorius は中間の立場を求めるのであつて Smith と全く反對の立場に走らうとするのではなく「私有財產及び相續の存する所では財產の獲得及び使用の自由が條件附で行はれるといふ事は如何なる意味に於ても最も好ましい事である　又斯くて外敵に對する保護、國內に於ける裁判の施行及び一定の制度の發達といふ事は扨て置きとして、國富の增進に就ての政府側の協力は、若しも適當の範圍を脫せぬならば之れ又奬勵せらる可きことである。此範圍は一部分は條件と事情に依て異るが一部分は一般的原理に依て決せられ得るものである」と說いた。

以上 Sartorius の Smith の說に對する反對論は Lauderdale の批評を借用したのでなく自己獨得のものであつた場合にはそれは彼が大陸の居住者であつたといふ事實に歸し得るものであつた。即ち末だ Mercantile System が大なる勢力を有してゐて之を適用する事が經濟的存續を支持するに必要な觀のあつた歐洲諸國の間にあつては Smith に依て示された自由貿易論は餘りに理論的なものと見做された。斯くて Sartorius は此二つの經濟思想體系の間に折衷を求めたのである。彼の批評は此一點に於てのみ Smith の遺した思想に對して積極的に何物かを貢獻したものと認められる。爾餘の反對論は主として Lauderdale の思想に基く消極的のものであつた。

四

Smith の見解を內容とした獨乙に於ける第二の著書は August Ferdinand Lueder の Über National-industrie und Staatswirtschaft, Nach Adam Smith bearbeitet von A. F. Lueder. Berlin 1800-1802. 二卷である、Lueder は一七六〇年に Bielefeld に生れ一八一九年 Jena に於て五十九才で世を去つた。彼も亦 Götingen 大學の出身であつて、一八一〇年から一八一四年まで母校の哲學敎授を勤め、一八七年に Jena 大學の名譽敎授に奉ぜられた。彼の著作は主として統計學就中地理統計の方面であつた。その關係上一種の拔萃書を編輯し Historische Portefeuille. 1787-1788. 及び Repositorium für Geschichte, Staatskunde und Politik. 1802-1805. を刊行した。之等の拔萃書の編輯に當つて行つた外國の文獻批評が彼を Smith の著書の研究に導いたのである。第四の著作たる Die Nationalindustrie und ihre Wirkungen, ein Grundriss zu Vorlesungen, 1808. は殆んど前著の燒直しに過ぎなかつたが

一八一二年及び一八一七年に發表された二書 Kritik der Statistik und Politik nebst einer Begründung der politischen Philosophie vom Professor Lueder in Göttingen. 及び Kritische Geschichte der Statistics. は一國民の活動に就ての統計的解說の無益なる事を最も熱心に示さうとしたものである。

最初の著書であり又最も大著である前掲 Über Nationalindustrie und Staatswirtschaft. は一部分は「國富論」の意譯に過ぎぬが又一部分は經濟學を一層廣く組織的に述べやうとしたものである。第一卷の序文中に於て Lueder は先づ Smith の靈に敬意を表し、そして獨乙には立派な飜譯のあるにも拘らず Smith の影響の少ない事を指示した。次に Smith の思想の普及をおそらくは阻害した原因であるその著書の難解なこと、即ち用語の難解、明確さ又十分な說明の不足、解說の不完全及び枝論が多くて說明の勢を損じたこと等を指摘した。本文に入つては第一篇分業、第二篇資本、第三篇自然と論じて Smith を祖述した之等の諸篇中に彼が附加へたものは彼の地理並に統計學上の廣い讀書から得た例證であつた。第三篇は全く彼の著作であつて幾多の實例を擧げて資本の蓄積及び內外市場の發達に對する自然的條件の效果に就て述べた。そして之等三篇の殘部に於て Smith 以上に出て國家の目的を論じ、又第四篇では國家經濟を論じ、第五第六篇に入つて國家の唯一の職分たる安寧の維持が支配者の行爲、代表者或は非代表者の議會、又は市民自らに依て阻害され或は破壞される有樣を說いた。Lueder は Smith の影響を受けたと同樣に又佛蘭西革命の感化を蒙つてゐたので經濟的活動のみでなく有ゆる社會生活に於ける自由思想の熱烈な主張者であつた。Kritische Geschichte. の序文中に述べて「余は自由、眞理及び正義の爲めに有ゆる物を賭した」と。そして彼は國家の目的は保護を供する事だけにあると爲した。斯かる思想を懷いて彼は第四篇に於ては奴隸制度の弊害を論じた。以上の如く本書は Smith の經濟上の自由思想を奉ずると共に更に經濟論の限界を越へて國家論並に國家內にありて個人が自由を獲得する手段方法に論及したのである。

Lueder は此二卷の大著中に於て「國富論」に對して何等の反對もせず又何等の進步をも示さなかつた。彼はその序文に明かである樣に彼の目的は Smith の理論を正し又之を整へる――おそらくは第二卷中に彼が述べた政治學上の理論を加へて――にあつた。Smith の著書を利用したのは「國富論」の第一第二篇のみであつて之等の二篇及び第三篇には多くの例證（主として經濟地理書から）が擧げられたが理論は Smith そのまゝであつた。又多數の著者からの引用もその大部分は地理書及び旅行記であつて經濟學者では Büsch と Steuart の二人が揭げられたばかりである。彼の目的は人類の產業的活動の理論的說明を爾餘の社會關係の解說と結付けやうとするにあつた。此目的の爲めに Smith に依賴したのであつて地理及び歷史上の多數の實例が斯くと認められぬ限りその理論には何、等の修正をも加へなかつた。

Smith の思想の彼に對する感化は Lueder が Cameralist 思想の時代に行つた統計學と國家政策とを共に排斥するに至つた事實にも見る事が出來る。國家の事柄に關する統計的研究の原則は Smith の思想の根底に橫はる個人的自由の原則と相容れないものであるから排斥されねばならぬと彼は感じたのである。Cameralist 流の政策の排斥は Cameralist 流の手段の排斥を伴ふたのである。Lueder の立場は Kritik der Statistik und Politik. 中に明瞭に示されてゐる。即ち「統計は國家に關する知識を

何等與ふるものでなく、――國家に於て何にが健全であるか、疾患であるかといふ事を少しも示ずものでなく又決して之を指示さないであらうし又指示し得ないものである。ところが政策は如何にせば國家の安寧は維持增進せらるゝか、如何にせばその疾患は救治され得可きかを吾人に敎へなければならぬものであつて統計學に對しては丁度醫術が生理學に對する樣な關係に立つものであつて、政策は經驗からも亦理窟からも等しく引出され、未だ不合理な事柄に滿ち、又正しい常識や最も普通な日常の經驗を愚弄する樣な矛盾や假定說に滿ちたものである。」

又 Lueder は彼が國家內に於ける個人の最大自由の原則に執着した結果自己の畢生の事業の大半が無效になつた事を覺つた時のその絕望は之れ又前揭書の序文に述べられてゐる。「最も强固な柱と最も確かな土臺の上に統計學と政策と云ふ建物は立つて居る樣に私には思はれた。私は私の生涯の最も樂しい時と私の時の最大部分を統計學と政策に盡した。……併し時の流は餘りに速かである。私の骨髓までも染込んだ思想は批判され他の思想と取換へられねばならなくなつた。僻見は次から次へと僻見たることが認められねばならなかつた。……終に私の少なからず驚いたことには統計學といふ全建築物は朽ち又それと共に統計學なくしては何事も成就し得ぬ政策も崩壞してしまつた。私の識見が發達し又私の見解が明かになるに從つて統計學及び政策は益々見るに堪へざるものに思はれた。……」彼の悲しい追懷は一七九一年以後の急激な變遷が舊い哲學に養はれ思想轉換に甚だしい困難を感ずる人々の心に生じた混亂を最も良く示すものである。そして畢生の事業の破壞に悲しみを帶びてゐたのは止むを得ない事としてもその時代の混亂狀態が彼の態度の不合理な事を隱蔽してゐたのである。

Lueder の著作は彼の廣い讀書と Sartorius と同じ樣に英國の事情を十分理解してゐた事を示してゐる。彼の歷史及び統計に關する特殊の知識は多くの重要な實例を以て「國富論」の說明を補足した。佛蘭西革命と Smith の思想に感化された彼は熱心な Smith の學徒であつた。併し彼の文章は甚だ美文的で大袈裟であつて又その著述は粗略なものであり悲觀論の色彩を多分に帶びてゐた。彼は急激な時代の變遷にその意見を順應し得ない樣な人物であつた。そして彼の著書はその混亂時代の最も興味ある物の一として遺されたのである。

五

第三番目の又多くの點に於て Smith 經濟學の代表者として最も重要な經濟論者は Christian Jacob Kraus である。彼の敎を受けた學生たりし von Schön, von Schrötter 兄弟及び von Auerswald に對する彼の感化に依て、少なくとも第二 Stein 內閣の重要改革案の一であつた農奴解放は成遂げられたのである。Kraus は一七五三年に Osterode に生れ一八〇七年五十四才で Königsberg で長逝した。一七七〇年から一七七九年まで Königsberg 大學に通ひ、その間に Kant の講義に出席した。そして終に思想は相異つてゐたが Kant と親友になつた。卒業してから tutor となり此職にあつて一ケ年間を Göttingen 大學で送り Heyne, Feder 及び Schlözer の講義を聞いた。一七八〇年に Halle 大學の學位を得て Königsberg 大學へ實踐哲學及び官房學(Cameralia)の敎授として招かれ死ぬるまでその職に在つた。未だ彼が Königsberg 大學の學生であつた一七七六年に英語の勉强を志して Bailey

の辭典を暗記して極めて短時日に之を習得した。そして間もなく Young の Political Arithmetick. の飜譯に着手し多大の困難の後に之を完成して一七七七年に出版した。譯了はしたもの丶彼は此書を理解出來なかつたと自ら感じたほどその飜譯が困難であつた事が彼を廣く經濟上の著書の研究に導き、漸次此方面に對する彼の興味を喚起したのである。

Kraus が一七七九年に獨乙の他の大學でなく Göttingen 大學を訪ねたといふのは英國人に對する彼の崇拜と同地が獨乙の何處よりも英國の事物に親しみの多かつた事に依るのではあるまいか。それは兎に角として彼は統計及び國家經濟に對する興味を一層深く懷いて Göttingen を去つた。Königsberg 大學教授としての彼の講義は初めの頃は國家經濟、希臘古典、歷史、數學、實踐哲學及び Shakespeare の戲曲等に亘つたが、年と共に彼の興味は益々經濟學に集中し一七九四年には彼の講義は全然財政、政策、貿易、工業及び農業に限られる樣になつた。Kraus が「國富論」を研究し之を自分の經濟の論題中に紹介し始めたのは此頃であつた。一七九七年一月に一友人へ送つた書簡中にその年末休暇に軍事參議官 Scheffner から贈られた Sartorius の Handbuch (1796) に關して、彼が過去六年の間その講義中で「唯一の眞の、偉大な、美しい、正しい、そして有益な學說」を紹介して來たと述べた。又一七九五年十月の一友人宛書簡では「Adam Smith の國富に關する著書は私の主なる種本である。實際此本は之までに著はされた最も重要且つ有益な書物の一である。ところで若しも君がそれを學ばない場合には君が Garve の新譯で研究するまでは君をその儘打捨てゝは置かない。」と言ひ、更に又一年後の知人宛の手紙には「Scheffner が此世界には Adam Smith の著書よりも重要な書物は著はされなかつたと稱するのは確かに正しい。此本は國家の經濟に干與する總ての人々に一層良く了解されその心に更に徹するに至る時には新約聖書の時代以來如何なる著書が與へたよりも一層有益な效果を與へる樣になるだらう。」とまで稱讃の辭を與へてゐる。「國富論」に對する彼の嘆賞は年と共に加はり之を學生に敎へ込んだ。そして此學生中の或人々が後年普魯西改革時代の大立物となつたのである。又彼をして Frederick 王の經濟制度の批評並に改革論を說かせたのも Smith に對する此讃美であつた。

Kraus は獨乙の學者としては極めて著作の少ない人であつた。讀書界を過度に恐れた事、自己の立場の誤なき事の不確、及び彼の興味の廣き事(此事が計畫澤山にして完成し得ぬ樣にした)等が彼の死後に至るまで何等重要な著述を著はさせなかつた所以である。初期の哲學論文に次いで發表されたものは Über den Frachthandel. (1786) 及び Über das Seesalzmonopol. (1786) である。その死後に及んで友人達に依つて五卷の Die Staatswirtschaft von C. J. Kraus. Nach dessen Tode herausgeben von Haus von Auerswald. (Königsberg. 1808-1811) 及び八卷の Vermichte Schriften über staatswirtschaftliche, philosophische und andere wissenschaftliche Gegenstände von C. J. Kraus. (1808-1819) が出版された。彼には殆んど著述はなかつたが最も勢力のある敎授の一人であつて彼の講義は學生が堂に溢れ、同大學に於ては Kant を除いては最も重要な敎授と見做れてゐた。

Kraus の著書中最も意義あるものであり又最も明瞭に彼の經濟思想を示したものは前揭の Die staatswirtschaft. 五卷である。併しその初めの四卷は殆んど「國富論」の意譯に過ぎなかつた。說明の

順序すら之に倣ひ貴金屬の歴史は地代論中に挿入され、又Smithの用語がその儘用ひられ音樂家及び俳優の仕事はfrivolousであると稱された。併し英國の實例の代りに普魯西の例證を用ひたり又一層精細に區分してa、aa、aaa、といふ樣な小見出を附したりした。又普魯西の事情に殆んど關係のないSmithの植民地貿易論を長々と掲げるかと思ふと普魯西の農業狀態に就てSmithの論及したる僅かの說明しか記載しなかつた。斯くの如く第四卷までは僅かな修正を加へた「國富論」の紹介に過ぎなかつたが第五卷には應用國家經濟學の形式で彼の時代並に普魯西國家の必要に應じた獨創的の記述が存在してゐる。前の四卷とは全く相違して著者が一八〇七年以前に觀察した普魯西の實際の窮迫狀態が解剖され救濟策が提議された。又此部分は出版より寧ろ講義の爲に調べられるものであるから大意を述べたものであつて又往々問題の形式を借りて述べられた。Krausの總ての推論の基礎となつてゐる個人的發案の自由の假說は全くSmithの見解に從てゐた。即ち人間は自分の運命を開拓しやうと願望するものであると假定してゐる。彼の言葉を以て云へば「各個人がその運命を開拓しやうとの願望及び努力は宇宙に於ける重力の力と同樣に、總ての國家經濟の基礎である。」若しも彼等が之を開拓しないなら、それは彼等が行ひ得ないか、敢て行はないのか、さもなくば必要な知識、十分な刺激、或は普通の手腕を欠いてゐるかの何れかである。若しも一定の行爲を要求し或は他の行爲を禁ずる法律が通過するならば、何故人々は自ら進んで之を行はない樣にするか或は之を行ふのを止めない樣にするか。Krausには問題である。法律を潛る爲に彼等は何をするだらうか、又彼等は成功するであらうか。之等の疑問に從て彼は普魯西の經濟制度を生產業、製造業及び商業の見地から解剖し、何れの場合にも當時の抑壓制度の弊害を指摘し又企業の自由制度の下に於て一層大なる利益の納められる事を證明した。封建的農業組織の弊害は明かにされ、又土地の區分及び讓渡に關する規定の必要が主張された。農奴制度が經濟上浪費である事は說かれその撤廢の必要が立證された。土地信用制度の弊害は考究された。或品物の場合には相當の保護稅が至當である事が認められた。そして最後にGuildsは非難を蒙つた。そしてGuildsの同意を得て既得權に對する賠償を行つて之を廢止する樣にと薦めた。以上の如く此部分は現存の抑壓政策に代る可き個人的自由の新國家政策を組織的に述べたものであつた。そして之は政策であるといふ點ではCameralistsの流の國家干涉の傳統を續けたものではあるが、Smithの理論に基くといふ點では新しい形式の政策であつた。

八卷から成るVermischte schriften.では初めの二卷に二十一年の間（一七八六年――一八〇七年）に起稿せられた經濟問題に關する十一篇の論文が輯錄されてゐる。そして總て東部普魯西の行政に實際上重要な事柄のみが論及されてゐる。經濟顧問の氣持で書上げられた之等の論文中には一貫して私人の發案に對する一層大なる自由の原則が窺はれた。又幾所にも制限の撤廢といふ事が個人並に國家に一層大なる利益を齎すであらうと云ふ事が證示されてゐる。之等の論文の實際的な性質上その理論的根據に就ての議論は凡て除かれては居るが併しその根據はSmith經濟學の理論であると推定して誤ないものであつた。又之等の論文には經濟上の事柄に就て多くの註が加へられて居るのであるが、この事はKrausがSmithの理論中に含まれてゐる或ものに無智でなかつた事を示す

のである。

Kraus は Smith の謂ふところの價値に就て次の樣な疑問を懷いた。「Smith が國民所得を以て土地及び勞働の年生產物の價値であると斷定する時は次の疑問を生ずる。（一）若し生產物が增加するならば總價値に於ても亦增加するであらうか、或はその量の增加に因て價値を減ずる樣な事はなからうか。（二）或偶然の出來事例へば全國的災害に因てその量を減ずる時その總價値は增加しなくはなからうか。一國民にとつて一層重要な事は生產物の價値よりもその量ではあるまいか。問題は Smith は價値を以て何を意味するのかといふ事にある。彼は土地及び勞働の生產物を以て何を意味するのか。」Kraus は或生產物の實際交換價値を次の樣に定義してゐる。「或品物の本來の實際交換價値はそれを生產し、而してそれを市場に持出す費用である。」併し市場價格を左右する原因は雜多である「市場價格は、需要供給の關係に因て決せられる範圍に於ては、單に實際に希望され或は提供される量に因て左右されるのみでなく、又支拂はれるであらう或は提供せられるだらうと知り或は推測される量に因ても亦左右される。その上不安、希望及び殆んど有ゆる感情は授受される價格に影響する。」

Kraus は Smith の價値の尺度を疑問にしなかつた。「Smith の發見した交換價値の單位或は尺度が國家經濟上重要な事は恰かも速度に對して物理學上 Gailleo の發見した單位が重要なのと同樣である。」一國內に於ける貨幣の流通に關する眞の理論は何んであるか。「Smith は銀行を論じた中で國民經濟の一定の狀態に在つては唯々一定額の金銀貨が流通し得るのみであるとの原則を下した。併しその地に流入される新しい金銀の量は購買及び貸付の數を增加し得ないだらうか。」

以上の種々の疑問に依て Kraus は Smith の理論を全く無條件に承認しやうとしたのでない事は明かであるが、併し之等の反對論及び註解を遺稿編纂者が見出したのは斷片の覺書であつて何等組織的な理論の著述中に聚收されたものではなかつた。之等は凡て互に前後相一貫したものでもなく又 Smith の見解以外の一の統一的な見解を示すものでもなかつた。彼は Sartorius 或は Lueder に比して Smith の經濟思想に疑惑を懷く事が少なかつた。彼はその獨立の諸論文が示す如く、當時の實際問題に留意し、之等實際問題を Smith の自由貿易論の立場から解決しやうと企てたのである。彼が斯かる自由貿易の立場を殆んど何等の疑問もなく承認するに至つたのはその一生を Königsberg 大學から離れなかつた事、及びその繁榮が自由貿易に基く開港場の市民と共に暮したといふ事に因るのであつた。初期の獨乙經濟學者中に在つて彼だけが Glasgow に於ける Smith 一の地位と同樣の立場にあつた。そして又最も保留條件少なく Smith の思想を受容れた學者であつた。

一八〇七年以後普魯西に起つた經濟的變化に重大な關係のある Kraus その人の意見は Smith の影響に因るものと云ひ得る範圍內では以上述べた如きものである。Heinrich von Kleist が當時主筆であつた伯林の一新聞紙上に於て Adam Müller が Kraus を以て Adam Smith——最早その說は辯護し得ないものと Müller の見做す——の單なる復誦者に過ぎぬと批評したのに對して von Stein は Kraus を辯護稱揚して「……全國は彼を通じて光明と敎養とを得た。彼の見解は有ゆる生活方面、政治にも法律にも入つて行つた。若しも彼が華々しい新思想を示さなかつたとしても彼は決して名

聲を求める曲學者ではなかつた。平易な眞理を明白純正に說明し紹介した事及びそれを多數の聽衆に敎へるに成功したといふ事は空談や逆說を以て注意を喚起する事よりは一層大なる貢獻である。……Kraus は隨從者ではない。Kraus は謙遜な併し溫情な人格を有して居てその身邊の者に大なる感化を與へた。彼には新しい識見、著意の發作があつて屢々豫期せざる彼の斷案によつて我々は驚かされた。……」(Varnhagen von Ense, K. A., Denkwürdigkeiten des eignen Lebens. Leipzig, 1871)

以上述べ終つた如く經濟思想の方面に於ては一八〇八年までには Smith の思想は獨乙に於て可成り擴まつた。併しその進步は遲々として行はれたものであつて「國富論」が初めて注意されて以來二十五年を又之に共鳴して進んで鼓吹される樣になつて以來十年餘を經過した。Sartorius, Lueder, Kraus と同時代の人々及び彼等の後繼者――Hufeland, Soden, Lotz, Krag 及び Jakob の如き人々――は Smith の學說を認めるのに重大な修正を加へた。一八〇五年から一八〇八年に至る間に之等の人及び爾餘の人々の著書は發表された。そして獨乙の政治及び經濟生活の急激な變化が惹起しつゝあつた當時の經濟上の出來事に關する强烈な利害關係にその論據を求めた。斯かる短時日の間に斯ほど多數に經濟に關する書物の公にされた事は未だなかつた。併し此時期に當つて Smith の學說そのものは他の方面、即ち Stein, Hardenberg 及び von Schön の如き政治家の活動舞臺にその勢力を振ひつゝあつたのである。（完）

前號（第二十卷第三號）目次

（大正十五年三月號）

「價値論の價値」　小泉　信三
金融資本網の組織　向井　鹿松
第十九世紀英國貿易概論　野村兼太郎
經濟地理學研究に關するシュミッドの見解　伊藤　秀一
森耕三郎著「リカード價値論の研究」　三邊　金藏
理財學會記事

●一冊定價金五拾錢
●半ケ年分金貳圓九拾錢
●一ケ年分金五圓四拾錢
郵稅金壹錢五厘
郵稅共

●編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛
●營業に關する用件は發賣元宛
●原稿締切期日は發行の前月十日限

大正十五年三月廿一日印刷納本
大正十五年四月一日發行
毎月一回一日發行

三田學會雜誌
禁轉載
第二十卷第四號

編輯兼發行者　東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾內　江田範保
印刷者　東京市赤坂區新町五丁目四十二番地　金子鐵五郎
印刷所　東京市赤坂區新町五丁目四十二番地　金子活版所

發賣元　東京市芝區三田貳丁目壹番地　丸善株式會社三田出張所　電話高輪一九二六
●尙ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す

發行所　東京三田芝慶應義塾內　理財學會